2023年9月22日

尾道市長　平　谷　祐　宏　殿

一般社団法人　日本建築学会中国支部
支部長　杉　田　洋

尾道市立久保小学校と土堂小学校校舎の保存活用に関する要望書

拝啓　時下益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。日頃より本会の活動につきましてはご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、貴市では尾道市内に所在します久保小学校と土堂小学校を含む3小学校と2つの中学校を統合された上、久保小学校の跡地に新設校を開設される旨、報道等により聞き及んでおります。

御存じの通り、久保小学校と土堂小学校の校舎はそれぞれ1933（昭和8）年、1936（昭和11）年に完成した戦前の鉄筋コンクリート造の建築です。

別紙「見解」に示しました通り、2つの小学校校舎はともに、中世から近代にわたって経済都市、文化都市として発展した尾道の繁栄の歴史を象徴した建築であり、コンクリートの特性をいかした造形的な外観、教室の配置計画など、戦前の鉄筋コンクリート造小学校校舎の特性をよく示した建築でもあります。また、戦前の鉄筋コンクリート造小学校校舎は各地で取り壊しが進み、現在では数が少なりなりつつあります。一部分が保存された例をのぞくと、久保小学校と土堂小学校の校舎は広島県では唯一の現存例です。以上のことから、貴重な文化遺産であると考えられます。

また、鉄筋コンクリート造建築の耐震補強は近年、様々な技術が開発され、実績をあげています。耐震補強工事等を行うことにより、尾道の個性ある文化と町並みを担ってきた建物として、教育施設の記憶を継承しながら幅広く活用され続けることが望ましいと考えられます。

貴市におかれましては、久保小学校、土堂小学校の戦前の校舎が持つ文化遺産としての価値について改めてご理解をいただき、ぜひ、校舎の保存活用をご検討いただけますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げる次第です。

なお、本会としましては、これらの建物の保存活用に関して、学術的、建築技術的観点からのご相談をお受けいたす所存であることを申し添えます。

敬具

2023年9月22日

尾道市議会議長　　吉　和　宏　殿

一般社団法人　日本建築学会中国支部
支部長　杉　田　洋

尾道市立久保小学校と土堂小学校校舎の保存活用に関する要望書

拝啓　時下益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。日頃より本会の活動につきましてはご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、貴市では尾道市内に所在します久保小学校と土堂小学校を含む3小学校と2つの中学校を統合された上、久保小学校の跡地に新設校を開設される旨、報道等により聞き及んでおります。

御存じの通り、久保小学校と土堂小学校の校舎はそれぞれ1933（昭和8）年、1936（昭和11）年に完成した戦前の鉄筋コンクリート造の建築です。

別紙「見解」に示しました通り、2つの小学校校舎はともに、中世から近代にわたって経済都市、文化都市として発展した尾道の繁栄の歴史を象徴した建築であり、コンクリートの特性をいかした造形的な外観、教室の配置計画など、戦前の鉄筋コンクリート造小学校校舎の特性をよく示した建築でもあります。また、戦前の鉄筋コンクリート造小学校校舎は各地で取り壊しが進み、現在では数が少なりなりつつあります。一部分が保存された例をのぞくと、久保小学校と土堂小学校の校舎は広島県では唯一の現存例です。以上のことから、貴重な文化遺産であると考えられます。

また、鉄筋コンクリート造建築の耐震補強は近年、様々な技術が開発され、実績をあげています。耐震補強工事等を行うことにより、尾道の個性ある文化と町並みを担ってきた建物として、教育施設の記憶を継承しながら幅広く活用され続けることが望ましいと考えられます。

貴市におかれましては、久保小学校、土堂小学校の戦前の校舎が持つ文化遺産としての価値について改めてご理解をいただき、ぜひ、校舎の保存活用をご検討いただけますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げる次第です。

なお、本会としましては、これらの建物の保存活用に関して、学術的、建築技術的観点からのご相談をお受けいたす所存であることを申し添えます。

敬具

2023年9月22日

尾道市教育委員会
教育長　　宮　本　佳　宏　殿

一般社団法人　日本建築学会中国支部
支部長　杉　田　洋

尾道市立久保小学校と土堂小学校校舎の保存活用に関する要望書

拝啓　時下益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。日頃より本会の活動につきましてはご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、貴市では尾道市内に所在します久保小学校と土堂小学校を含む3小学校と2つの中学校を統合された上、久保小学校の跡地に新設校を開設される旨、報道等により聞き及んでおります。

御存じの通り、久保小学校と土堂小学校の校舎はそれぞれ1933（昭和8）年、1936（昭和11）年に完成した戦前の鉄筋コンクリート造の建築です。

別紙「見解」に示しました通り、2つの小学校校舎はともに、中世から近代にわたって経済都市、文化都市として発展した尾道の繁栄の歴史を象徴した建築であり、コンクリートの特性をいかした造形的な外観、教室の配置計画など、戦前の鉄筋コンクリート造小学校校舎の特性をよく示した建築でもあります。また、戦前の鉄筋コンクリート造小学校校舎は各地で取り壊しが進み、現在では数が少なりなりつつあります。一部分が保存された例をのぞくと、久保小学校と土堂小学校の校舎は広島県では唯一の現存例です。以上のことから、貴重な文化遺産であると考えられます。

また、鉄筋コンクリート造建築の耐震補強は近年、様々な技術が開発され、実績をあげています。耐震補強工事等を行うことにより、尾道の個性ある文化と町並みを担ってきた建物として、教育施設の記憶を継承しながら幅広く活用され続けることが望ましいと考えられます。

貴市におかれましては、久保小学校、土堂小学校の戦前の校舎が持つ文化遺産としての価値について改めてご理解をいただき、ぜひ、校舎の保存活用をご検討いただけますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げる次第です。

なお、本会としましては、これらの建物の保存活用に関して、学術的、建築技術的観点からのご相談をお受けいたす所存であることを申し添えます。

敬具

2023年9月22日

尾道市立久保小学校と土堂小学校校舎に関する見解

一般社団法人　日本建築学会中国支部
建築歴史・意匠委員会
委員長　河　田　智　成

１．久保小学校校舎の概要

尾道市立久保小学校は、尾道の中心市街地の東側に所在する。すぐ隣に西郷寺があり、体育館へはこの西郷寺の参道の下をくぐって往来できるようにしている。

久保小学校は、1873（明治6）年に土堂町の天寧寺に置かれた小学温柔舎を起源にもつ。後に尾道尋常小学校となり、1897（明治30）年に現在の場所に校舎を新築移転する。その時の校舎は木造二階建ての建物だった。1920(大正9)年には久保尋常高等小学校と改称し、1933（昭和8）年に現在残る鉄筋コンクリート造の校舎を完成させている。当時の在校生の想い出によると、完成した当時は広島県一の校舎として評判だったという（『創立百周年記念誌』尾道市立久保小学校，1973年)。

久保小学校の校舎は、鉄筋コンクリート造三階建て、屋根は陸屋根とする。北側と東側から校庭を囲むように校舎をＬ型にした構成をとる。北西隅と南東隅、そしてＬ型の入隅の部分の３か所に出入り口と階段を置き、北西隅と南東隅は塔屋状にする。縦長の窓を３つずつ等間隔に並べ（北西隅は２つずつ)、外壁に柱型をつける。外壁の上部はへこませて、正面から見た時にアーチ状になるように段をつける。全体的に柱型によって垂直線を強調し、アールデコを思わせる立面構成に仕上げた外観である。内部は、Ｌ型平面の北側部分は北側に廊下を通し、グランドに面して教室を並べる。Ｌ型平面の東側部分は西側に廊下を並べ、グランドと反対に教室を並べる。教室の大きさは梁間方向に7m、桁行方向に9.1m、廊下の幅を2.1mで統一されている。教室、廊下ともに天井高は3.6mである。

設計は尾道市土木課の営繕技師である前田清二が中心になったとされる（川島智生「尾道市における歴史的小学校校舎の建築史学」『文教施設』29号，2008年)。施工は同じ尾道市久保町の水草嘉太郎が率いた水草組である。当時の棟札が今も残されている。

２．　土堂小学校校舎の概要

尾道市立土堂小学校は、尾道の中心市街地の西側、駅の北東の高台に所在する。周辺は斜面市街地であり、小学校の付近には戦前の洋風住宅もいくつか残されている。また、敷地の西隣りには承和年間（834-848）に草創されたという持光寺が接している。

土堂小学校は、1900（明治33）年に設立された第二尾道尋常小学校を起源とする。現在のアーケード街に面した平坦な場所に敷地があった。1903（明治36）年に現在と同じ持光

寺西側の敷地に工事をはじめ、翌年6月に木造二階建ての新築校舎を完成させた。1920（大正9）年に校名を土堂尋常小学校と改称した。1927（昭和2）年には校舎の南に木造の講堂を建設している。1935（昭和 10）年には、木造の校舎の東側部分（東校舎）を取り壊し、ここに鉄筋コンクリート造の新築校舎の工事に着手、1936（昭和11）年に完成させている（『土堂小学校創立八十周年記念誌』尾道市立土堂小学校，1980年）。

土堂小学校の校舎は、鉄筋コンクリート造三階建てで、屋根は陸屋根である。南北に長い建物で、西側に戦後に建てた鉄筋コンクリート造4階建ての新校舎がとりつく。また、南側に3スパンの増築をおこなっている。玄関と階段を南端（増築部の北側）に置き、その上を塔屋状にする。外観は、平坦な外壁を基本とするが、玄関や塔屋の部分に枠をつけてグラフィカルに仕上げる。窓は1階と2階は方形だが、3階のみ半円アーチの縦長窓を並べている。内部は、東側に教室を並べ、西側（グランド側）に廊下を通す。教室の大きさは梁間方向に7.125m、桁行方向に9.1m、廊下の幅は2.25mで統一する。教室、廊下ともに天井高は3.75mである。

土堂小学校校舎の設計の中心となったのは、前述した前田清二の跡をついで尾道市の営繕技師となった杉原修蔵が考えられている。

3．土堂小学校と久保小学校校舎の学術的価値

土堂小学校と久保小学校校舎の学術的な価値として次の3点を挙げることができる。

① 尾道の経済的・文化的発展を示す建物であること

尾道は中世から続く港湾都市であり、経済都市である。海上交易によってもたらされた経済的繁栄は浄土寺、西国寺、西郷寺など、日本の宗教文化の最先端を伝え、優れた寺社建築を現在に残している。久保小学校、土堂小学校の敷地も寺社に接し、歴史的なかかわりが推定される。

明治以降も尾道の経済発展は続き、東京や大阪の企業が支店を構え、中心部には優れた近代建築が建設され、山麓には茶園と呼ばれる別荘が構えられた。文豪ゆかりの邸宅も近い。戦前の広島県では、広島と呉にしか建設されなかった鉄筋コンクリート造の小学校が建設されたのも、このような経済的発展、そして尾道がもっていた豊かな文化的背景があってのことである。

久保小学校、土堂小学校の両校舎は長い歴史と文化に培われた尾道の歴史資産として高い価値を有している。

② 戦前の鉄筋コンクリート造小学校校舎の特性をよく示す建築であること

日本で鉄筋コンクリート造の小学校校舎が広く普及したのは、1923（大正12）年におきた関東大震災の復興事業の時である。震災直後の1925（大正14）年から1935（昭和10）年にかけて、東京の下町と呼ばれるエリア一帯に不燃化を目指した鉄筋コンクリート造の小学校（復興小学校）が数多く建設された。また、復興小学校と時期をほぼ同じくして、京都、神戸、大阪の関西の大都市にも鉄筋コンクリート造の小学校が多く建設されている。

戦前の鉄筋コンクリート造小学校校舎の意匠上の特色は、コンクリートの可塑性（型枠ができればどんな形でも作ることができる）を活かした造形にある。特徴的な外観の一つには壁の外側に柱型をつけて垂直線を強調したアールデコ風のデザイン（東京都の旧明石小学校校舎）、もう一つにはアーチや放物線を多用した表現主義風のデザイン（東京の泰明小学校校舎や京都の淳風小学校校舎）がある。また、当時流行していたモダニズムの意匠を参照し、ガラスで囲まれた開放的な階段室や大きくて四角い窓を連続させた外観も認められる（東京の旧四谷第四小学校）。

尾道の久保小学校、土堂小学校の校舎はこういった全国の戦前の鉄筋コンクリート造小学校のデザインと相通じるところが多い。昭和初期の鉄筋コンクリート造小学校の特性をよく示した建築と評価できる。

③　広島県では唯一の戦前の鉄筋コンクリート造小学校校舎の遺構であること

関東と関西を中心に数多くの建物が建設された戦前の鉄筋コンクリート小学校だが、現在、その数は急速に失われている。取り壊しのニュースも後を絶たない。身近な存在であったがゆえに気が付いたら希少なものになっている場合も多くあるだろう。

日本建築学会では全国に残る明治大正昭和戦前の建築をリスト化し、『日本近代建築総覧』（以下、『総覧』）を 1980 年に発行した。さらに、『総覧』に掲載された物件の追跡調査および追加調査をおこなった結果を「日本近代建築総覧（追補）」（以下、「総覧（追補）」として、1998 年から 2000 年に『建築雑誌』に連載している。2020 年に『総覧』と「総覧（追補）」を確認したところ、戦前につくられた RC 造の小学校校舎は約 370 件だった。さらに、各学校や自治体のインターネットホームページ、地理情報システムなどで、現存の有無を調べたところ、『総覧』や「総覧（追補）」に掲載された戦前の RC 造小学校校舎で現存するのは 70 件ほどだった。このうち、現役で小学校の校舎として使われていたものは 40 件ほどだった。今や戦前の RC 造小学校校舎は、その数を急速に減らしている貴重な存在といってよい。広島県内では、校舎の一部が保存された広島市の袋町小学校と本川小学校の平和資料館を除くと、尾道市の土堂小学校と久保小学校が戦前の RC 造小学校校舎の唯一の遺構である。なお、中国地方では岡山市の旧内山下（うちさんげ）小学校（昭和初期）と下関市の王江小学校（1938 年）が他に現存する。

全国的にみても遜色のないレベルの建築作品が地方都市尾道に残され、つい最近まで現役で使われていた。それは市民の誇りにもなりうる。取り壊してしまうと二度と戻すことのできない財産であり、その保存が強く求められる。

４．総合所見

尾道市立久保小学校、土堂小学校の校舎は、尾道の歴史と文化を示す遺産、戦前の鉄筋コンクリート造小学校校舎の好例、そして地方都市の近代建築として、学術的・文化的価値の高い建物といえる。

鉄筋コンクリート構造の建物の耐震補強は近年、様々な技術が開発され、各地の歴史的

建造物の保存修理で実績を蓄えつつある。耐震補強工事等を施すことにより、現存する建物を使い続けることも改めて検討できると考えられる。

また、久保小学校、土堂小学校は、文化都市・経済都市としての尾道の歴史を物語る建物である。著名な文化人ともかかわりが深い。歴史ある寺社や別荘が立ち並ぶ坂道を子供たちが通う風景は、画一的な市街地が広がる現代にあって、個性ある尾道の財産ともいえる。尾道の歴史ある文化を育んだ建築として、また生きた町の資産として、これからも教育施設としての記憶を継承しながら幅広く活用され続けていくことが望ましいと考えられる。

尾道市立久保小学校校舎外観（水田丞撮影）

尾道市立久保小学校内部階段親柱（水田丞撮影）

土堂小学校校舎外観（水田丞撮影）

土堂小学校校舎内部階段室（水田丞撮影）